

大学では「自分で考える」ことが求められます。しかし、AI が普及した昨今、日常生活では「自分で考える」ことは必須ではなくなっているようにも思えます。それでも、あえて「自分で考える」ことを身に付ける意義はあるのでしょうか。その答えは、おそらくみなさんが大学生活の中で見出していけることでしょう。今回の記事が、それを考えるヒントになればと思います。

もうある答えを考える必要はなくなった

世の中にすでに存在する答えを、あえて自分で考える必要は、もうあまりないかもしれません。特定の問題に対する一般的見解から、効率的な部屋の片付け方、レポートの書き方(あるいはレポートそのもの)、友達の作り方まで、AI が瞬時に答えを返してくれます。

以前は、そんなに速く効率のいい回答を返してくれる媒体はありませんでしたから、上記のような問題も「自分で考える」必要がありました。それが思考の訓練にもなっていたでしょう。しかし、現代ではAI よりも優れた回答を、AI よりも速く出せる人はほとんどいないでしょう。いくら訓練してもどのみち AI 以上にならないなら、あまりやる気が起きません。



まだない答えを発見するのは？

まだ答えが存在しないことなんてあるのでしょうか？せいぜい先端研究をしている研究者にだけ関係がある話でしょうか？

ではたとえば、今、目の前にいる人と有意義な会話をするには、という問題はどうでしょう。仮に、関係の個別性と自己理解の限界という難問をクリアできたとしても、有意義かどうかは主観的判断になります。一般的に有意義とされる内容だったかは AI が答えてくれますが、あなたの主観的満足は、あなたがその会話の意味付けを、自分なりにどう考えたかによります。

いわば、正解の生き方は考えなくても教えてもらえますが、それで自分は幸福かどうかというのは、「自分で考え」ないと、感じる事が難しいと言えるかもしれません。



※SCR Press は記事の質を維持するため、今年度より季刊となります。Vol.72 は 7 月に発行いたします。よろしくお願い申し上げます。